



Title	ハックスリーの探究(II) : 『恋愛対位法』について
Author(s)	三浦, 良邦
Citation	Osaka Literary Review. 1973, 12, p. 89-97
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25738">https://doi.org/10.18910/25738</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ハックスリーの探究（Ⅱ）

### ——『恋愛対位法』について——

三 浦 良 邦

ハックスリーの探究（Ⅰ）（O.L.R.No.XI）に於いて、1920年代の初期3小説を中心に、彼の「すべての人間経験に基づいた人生観」の探究の過程をみてきたが、この小論に於いてはその延長線上にある『恋愛対位法』（以下『対位法』と言う）を中心に作者の人生観を考察してみたい。

この小説のテーマは、小説の冒頭に銘記されたフルク・グレヴィルの詩に端的に示されている。

Oh, wearisome condition of humanity,  
Born under one law, to another bound,  
Vainly begot and yet forbidden vanity,  
Created sick, commanded to be sound.  
What meaneth nature by these diverse laws,  
Passion and reason, self-division's cause?

理性面と感情面に自己分裂した人間の状態はすでに前3作に於いて、特に肉体と精神のアンバランスを描いたサー・ハーキュリーズの挿話等の中に見られる。しかし、『対位法』ではこの自己分裂は、作中相当数の人物が登場するが、ランビオン夫妻を除いたすべての人物に顕著に見られ、現代人の本質の状態として提示されている。ある者は本能によってのみ生活し、ある者は精神を強調し、彼らはその犠牲者として描写されている。

人間の肉体的本能を代表する人物としてルーシー・タンタマウントとジョン・ビドレイクがいる。前者はヴィヴァッシュ夫人と同様利己的で、性

を平凡な日常活動、快楽の源泉としてのみ考え、果てしなく新鮮な刺激・肉体的快楽のみを求めている。後者は漁色家の画家で “handsome, huge, exuberant, careless ; a great laugh<sup>(1)</sup>er, a great worker, a great eater, drinker, and taker of virginities” である。しかし、彼はこのような終生の本能にのみ生き、精神面を疎かにした結果、老年になって「幽門」にできた「わずかな障害物」の為に死のみじめな恐怖に打ちひしがれている。フィリップ・クォールズ、エドワード・タンタマウント卿は知性を中心に生活している。ハックスリーの人物であるフィリップは後述するとして、エドワード卿は動物の性活動には職業的な興味を示すが、人間の同じ行為には痛ましい程不安を感じる生物学者である。知性的には大人で肉体的・情緒的には胎児と同じなのである。

At forty Lord Edward was in all but intellect a kind of child. In the laboratory, at his desk, he was as old as science itself. But his feelings, his intuitions, his instincts were those of a little boy. Unexercised, the greater part of his spiritual being had never developed. He was a kind of child, but with his childish habits ingrained by forty years of living.<sup>(3)</sup>

彼にとっては他との合一の可能性は生物学的方法という一面的な接近によつてのみ可能なのである。彼はシアウォーターと同様学者の典型であり、彼の描写にはハックスリーの現代の科学時代に対する批判が感じられる。

ウォルター・ビドレイクはバーラップの『文学世界』で働いている青年であり、彼には理性的・良心的な一面と情緒的・肉体的な一面とが併存している。酒好きの夫に虐待されていた家庭的なマージョリーに同情し、彼女と同棲し妊娠させる。しかし、一方では彼女の冷淡な精神性に堪え切れず、理性では反発しながら、ルーシーの肉体的魅力のとりこになり、彼女に気狂いじみた情熱を燃す。その結果、現在では彼は理想とする愛と現実の肉体的愛との相対する願望によって自己分裂を起こし、自己嫌悪に陥ち入っている。上述したデニス・バーラップはハックスリーが戦前その下で働いていたミドルトン・マリーをモデルにした人物であり、自身では気づ

かずにいる自己分裂者である。彼は自身は敬虔でキリスト教を信じ精神生活を送っていると信じているが、実際は宗教をかくれみのに、子供の真似をして卑劣な誘惑を行ない、調子のよい生活を過している偽善者であり、通俗思想家である。プロレタリア出身の科学者で共産主義者であるフランク・イリッジも同様な犠牲者である。彼は上流階級に激しい劣等感と敵意を持ちながら、エドワード卿の下で助手をしており、また言葉の激しさの割には勇氣と行動力に欠ける小心者である。彼の共産主義は理性的になろうとしながら、その信念・態度に於いて矛盾しているのである。モリス・スパンドラルは登場人物中最大の自己分裂の犠牲者であり、その矛盾は極端に逆説的な形で提示されている。彼は幼少時には理想への希望にあふれ、未亡人の母を敬愛していたが、その母の再婚により実生活に絶望する。そして彼の挫折したロマンティズムは反動として神の否定という完全な自己倒壊を引き起こし、現在では社会悪と考えられる事柄を無意味に犯している。若い娘を意識的に誘惑、墮落させ、年老いた売笑婦を虐待し、ウェブリーを殺害し、最後には自殺同然の死に方をする。彼は神の存在の確認を願いながら、悪のかぎりをつくしているのであり、彼の悪魔か天使かという二者択一は彼をして人間として存在することをやめさせているのである。ランビオン流に言うと、彼は感覚、本能に従って人間らしく生きることをやめ、人間以上の神とか絶対を捜し求めるからまちがったのであり、その為に非人間となったのである。

上述した人間は本能と理性を調和させることに失敗し、自己分裂の状態に置かれている。ハックスリーは現代社会に存在する多様な人間性の一つずつ取り出し、人間にその一つの性格を極端にまで表現させ、即ち人物を戯画化して描くことにより、現実と調和できない自己中心的で片面的などちらか一方に偏した性格・生活様式を批判しているのである。何故このような自己分裂が起ったのか。作中ランビオンは人間の本質的狀態を次の様に述べている。

A man, mind you. Not an angel or a devil. A man's a creature on a tight-rope,

walking delicately, equilibrated, with mind and consciousness and spirit at one end of his balancing pole and body and instinct and all that's unconscious and earthy and mysterious at the other. Balanced.<sup>(4)</sup>

ところが、現代人はその釣合いを失っている。頭脳のみが巨大に発達し、肉体がそれに釣合わない程貧弱である。キリスト教・合理主義思想・科学的機械文明の精神・理性の偏重が肉体的本能を圧迫し、精神性を過度に発達させたのである。その結果人間の感覚や感情がひどく退化してしまったのであるが、不当に無視された肉体や本能は消滅したのではなく、いつか反旗をひるがえす。そこに20世紀現代人の破綻の理由がある。人間以上になろうとして人間以下になっているのである。以上がランピオンの理論である。

マーク・ランピオンはハックスリーの友人のロレンスをモデルにした人物であり、ロレンスの書簡集の編者であるハックスリーの共感を受けた作品中戯画化されていない唯一の人物である。彼ら夫妻の出会い・求婚・結婚は牧歌的に描写されている。そして彼の wholeness のテーマは self-division<sup>(5)</sup> のテーマの counter theme となっている。彼は作中完成された人間として他の人物の不十分さを暴露する一つの基準として提示されており、現代人の不完全さと自己分裂に対照的な wholeness の可能性を論じている。ランピオンの理想とする人間は、精神も肉体も無視しない健全で調和のあるギリシヤ人であり、プレイクである。

'Blake was civilized,' he insisted, '*civilized*. Civilization is harmony and completeness. Reason, feeling, instinct, the life of the body——Blake managed to include and harmonize everything. Barbarism is being lopsided. You can be a barbarian of the intellect as well as of the body. A barbarian of the soul and the feelings as well as of sensuality. Christianity made us barbarians of the soul, and now science is making us barbarians of the intellect. Blake was the last civilized man.'<sup>(6)</sup>

ランピオンの理想は完全に全人格的に生きることである。完全な人間として、人間の動物的機能と理性的機能、肉体と精神の均整のとれた生活であ

る。そして彼自身は現実の世界を直視し、精神面・肉体面で過不足のないオール・ラウンドな生活をしている。

このランピオンの思想が1920年代後半にハックスリーが考えた現代人が模範とし、実践すべきであり、このような人生観を具現する人間によってのみ社会は良くなると考えた思想であると考えられる。ハックスリーは1929年発行の評論、『何をしよう』の中で人間の能力の片面だけでなくすべての能力——理性、感情、本能——を結合した人間が完全な人間だとし、多様性の人生哲学を考えている。彼は過去の人間は精神的な人間であるとし、肉体を無視した精神主義の哲学やキリスト教、現代の知的科学主義を批判し、ブレイク流の完全に人格的に矛盾に満ちた「多様な生」を生きる生き方を肯定している。つまり人間性の矛盾し対立するすべての要素——精神、知性、肉体、本能——を等しく重んじ矛盾を感じながらもそれらの調和のとれた生活、「多様の矛盾した姿のままの調和」の生活を行うのがハックスリーの理想であった。人間がその与えられた可能性を最大限に発揮して充実した生の営みに生きる様に説いているのである。そしてこのような人間を「生の讃美者」だとし、崇拜している。

The aim of the life-worshipper is to combine the advantages of balanced moderation and excess. The moderate Aristotelian partially realizes all his potentialities ; the man of excess fully realizes part of his potentialities ; the life-worshipper aims at fully realizing all——at living, fully and excessively living, with every one of his colony of souls. He aspires to balance excess of self-consciousness and intelligence by an excess of intuition, of instinctive and visceral living.... In a word, he will accept each of his selves, as it appears in his consciousness, as his momentarily true self. Each and all he will accept—even the bad, even the mean and suffering, even the death-worshipping and naturally  
(7)  
Christian souls. He will accept, he will live the life of each, excessively.

wholeness の人生哲学を具現しているランピオンと対照的なのが、小説家であり小説日記をつけているフィリップ・クォールズである。この人物は作者の全小説を通じて最も顕著な自画像の一人であり、ハックスリーの自身に対する痛烈な自己分析・批判を含んでいると考えられる。彼は知  
(8)

的趣味の人間の自己分裂を攻撃しながら、自身をも諷刺的に告発しているのである。例えばフィリップのびっことその結果としての孤独を愛し自己内部への逃避は作者の眼病とその結果に類似している。フィリップはランピオンの言葉を借りれば、‘an intellectual-aesthetic pervert’<sup>(9)</sup>であり、知性主義への攻撃・肉体と精神の葛藤が具現されている。彼は少年時代の事故の為びっこになり、その結果孤独を愛し自分だけの世界に閉じこもり、知性だけをよりどころにして生活している。

For in the ordinary daily world of human contacts he was curiously like a foreigner, uneasily not at home among his fellows, finding it difficult or impossible to enter into communication with any but those who could speak his native intellectual language of ideas. Emotionally, he was a foreigner. Elinor was his interpreter, his dragoman.<sup>(10)</sup>

彼は人生の傍観者として他人や物事を観察し分析・体系づけるのは得意であるが、知性だけが極度に発達し、情緒的な直観・本能・感情が欠除しており、自然な日常生活を過すことができないのである。つまり彼は人生を生きるよりも人生の思索家、注釈者なのである。しかしながら、彼は常に自身の情緒の不足、精神的生活の不毛性を感じ、自身の欠陥に気づいている。彼はランピオンに会うと自分の仕事の価値を疑い、知力の優位に不安を抱く。“I regarded the Search for Truth as the highest of human tasks and the Searchers as the noblest of men. . . . this famous Search for Truth is just an amusement, a distraction like any other, a rather refined and elaborate substitute for genuine living;”<sup>(11)</sup>そしてオール・ラウンドな生活をしているランピオンと自身を比較しながら自身の取るべき生活様式に気づいている。“The problem for me is to transform a detached intellectual scepticism into a way of harmonious all-round living.”<sup>(12)</sup>

このようにフィリップには自己変革の命題が存在する。言い換えれば、ハックスリーはフィリップの生活を描写しながら、自身はランピオンになろうと努力を傾けているのである。しかしフィリップは生来の性格の為に考えを実行に移すことはなかなか困難で、観念と現実との間には彼には飛

び越えられない深淵がある。

By this suppression of emotional relationships and natural piety he seems to himself to be achieving freedom—freedom from sentimentality, from the irrational, from passion, from impulse and emotionalism. But in reality, as he gradually discovers, he has only narrowed and desiccated his life.... His reason's free, but only to deal with a small fraction of experience. He realizes his psychological defects, and desires, in theory, to change. But it's difficult to break life-long habits ; and perhaps the habits are only the expression of an inborn indifference and coldness, which it might be almost impossible to overcome. And for *him* at any rate, the merely intellectual life is easier ; it's the line of least resistance, because it's the line that avoids other human beings. <sup>(13)</sup>

結局フィリップはこの段階では自身の欠点に気づき、肉体と精神を共に生かし調和することが人間の理想であることを理論的には肯定し、その必要を認めながらも、いまだ実践の段階ではなく、人生の傍観者としてとどまっているのである。消極的な傍観者の立場から自己を参加者の立場におく積極的な姿勢、更には分裂している自我から全人的な統一的自我へ向うのは『ガザに盲いて』のアントニー・ビーヴィスに持ち越されている。しかしながら、デニスとガンブリルの現実からの逃避、チェリファアの安易な現実主義と比較して、フィリップの意義は肉体や本能を主張する立場と争いながら、苦悩し成長して変化することである。そして行動力を失って想像と思考の世界に閉じこもっている現代知識人の苦悩とそれから脱出する方法が示唆されている様に思われる。

この小説は一般的に言われている様にハックスリーの神秘主義者としての発達の軌跡から外れている。前作ではキャラミーはメアリーの官能的誘惑に引かれながらも、肉体的なものを超越し、美と神秘を探究・理解することを切望して、山中での瞑想生活に入っていく。しかし、このキャラミーの神秘的傾向は『対位法』では全然発展せず、代りに初期作品に於いてすでに表われていた肉体と精神の二元性の問題が取扱われている。この理由として Peter Bowering が指摘している様に二つの主要な要因が考えられる。<sup>(14)</sup>一つはハックスリーの1925年の東洋への旅行の結果であり、もう一



つはロレンスの影響である。ハックスリーは1915年ガーシントンの荘園でロレンスに初めて会い、その後遠ざかっていたが1926年に再会して以来、ロレンスが1930年に死亡するまで彼に尊敬と愛情を感じ深くロレンスの影響を受けた。<sup>(15)</sup> Jocelyn Brooke はその影響を次の様に説明している。

Himself (as he often confessed) a prisoner of the intellect, debarred by his temperament from a complete and satisfying participation in the life of the senses, Huxley doubtless saw in Lawrence's 'philosophy of the blood' a possible means of escape from his own predicament. After Lawrence's death, however, he seems finally to have rejected (if somewhat reluctantly) the 'instinctual' approach to life, and in his subsequent works the Lawrentian influence becomes less and less noticeable.<sup>(16)</sup>

結局『対位法』はハックスリーの現代社会及び自己の直面する問題の完全な描写でありロレンスに従って一つの解決法を見つけたそうとした小説であると言えよう。彼は社会の様々な不完全な人間を諷刺しながら、精神と肉体の両面を持つ人間の理想的な生き方を考え、これら二つが調和された人間が完成された人間だと考えたのである。

注

- (1) *Point Counter Point* (London, 1963), p.27.
- (2) *Aldous Huxley : a Study of the Major Novels*, ed. Peter Bowering (London, 1968), pp.20—21.
- (3) *Point Counter Point*, p.26.
- (4) *Ibid.*, p.560.
- (5) *Aldous Huxley : a Study of the Major Novels*, p.81.
- (6) *Point Counter Point*, p.144.
- (7) *Do What You Will* (London, 1956), pp.282—283.
- (8) *Aldous Huxley and the Way to Reality*, ed. Charles M. Holmes (London, 1970), p.66.
- (9) *Point Counter Point*, p.564.
- (10) *Ibid.*, p.105.
- (11) *Ibid.*, p.443.
- (12) *Ibid.*, p.440.

- (13) Ibid., p.474.
- (14) *Aldous Huxley : a Study of the Major Novels*, p.77.
- (15) *Letters of Aldous Huxley*, ed. Grover Smith (London, 1969), p.332.
- (16) *Aldous Huxley*, ed. Jocelyn Brooke, p.21.